

二〇二五年度・学力考査問題【国語】

(中学第一回)

注意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は13ページで□・○・△の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に数えます。

線⑥⑦のひらがなを漢字に直しなさい。

- 1 新しい政策にはけんとうの余地がある。
- 2 制度のこんかんを考え直す。
- 3 景気のこうたいを不安視する。
- 4 パーティのしかいを務める。
- 5 生物界の頂点にくんりんする。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

駅から続く商店街の端にある銭湯の男たちは、代々名前に「正」がついた。今日番台に座っている年老いた男は「正太郎」、息子は「正彦」、小学校に上がったばかりの孫は「正之助」という。

いつから「正」を名前に含めるようになったのか、今では誰も知らない。誰がそう決めたのかも。「正太郎」は、父の「正吉」から、男だったら「正」をつけるのがうちの決まりだと聞いた。物心ついたときには父から繰り返し言われていて、「正」は男の名前にしかつけることができないのだと思込んでいた。正太郎は幼稚園には行かなかった。正太郎が子供のころは、幼稚園に行く子供はまれだった。町で一か所きりの幼稚園に向かいのみつちゃんやが制服を着て通う姿が羨ましかった。ともかくも、向こう三軒両隣といとこたち程度の狭い世間しか知らなかった。正太郎は、小学校に入って少々混乱した。担任の「正木」先生は女に見えなし、同じ教室に「正子」もいたからだ。ほんとうは男なのに事情があつて女のふりをしているのだと正太郎は思った。そんな物語を聞いたこともあつた。世継ぎの男児がいると知れると殺されるので女と偽って育て、やがてその子が成長して親の敵討ちに出る。その話の結末は覚えていなかったが、ちよつとした冒険譚にわくわくした感覚だけは強く残っていたので、正木先生や上村正子が実は男だと知っているのは自分だけだ、ばれないようにしなければ、とひやひやしなから半年ほど過ごした。夏休みに正木先生が結婚したと親たちが話しているのを聞いたころから、なんとなく、「正」は男だけのもの

のではないと理解していった。

それほど強くすり込まれた名前の決まりだったので、正太郎は父・正吉にいつ誰が決めたことなのかと聞くことさえ思いつかないまま、大人になって親戚の紹介で隣町の娘と結婚し、初めて生まれた子供が男だったから当然のように正彦とつけた。正彦が生まれる直前に、正吉が脳出血で急死した。だから父は孫の顔を見ることはなかった。しかし、男だったら「正彦」ということは知っていて、満足げだった。正太郎の妻・明子は、「正彦」という名前がそれなりにいい響きで画数も悪くなかったし、父や祖父から一文字受け継ぐというのもごくありふれたことで、正太郎が言った、「正しい行いをする人間になってほしい」というもつともらしい命名理由にも納得していた。

三年経って二人目が生まれるときになって、男なら「正人」だと正太郎が言い出したとき、二人とも「正」はややこしいと抗議して、そのとき初めてこの家では男はみんな「正」と決まっているのだと夫から聞かされた。決まっているって誰が決めたの、と妻は問うたが、正太郎は、そんなもん、昔っからそうなんだからしょうがねえ、おれの代で勝手なことをしたらあの世で親父に合わせる顔がねえじゃねえか、と意固地になって譲らなかつた。親父の弟も正一郎だし、じいちゃんもその弟たちもみんな「正」がついて、おふくろもばあちゃんもそれに文句なんか言ったことなんか一回もなかつたよ。

理屈に納得しなければ行動できない明子にとつては、それは唐突で理不尽極まりないことに思えた。男ならみんな「正」って言ったって、名前に使える漢字なんて限られてるのに家の中に何人も「正」がいたらわかんなくなっちゃうじゃないの。息子たちだつて混乱す

る。次男の名前はなかなか決まらなかつた。決まらないまま、次男は生まれ、生まれてからも正太郎と明子の意見は一致せず、出生届を提出する期限の日がやってきて、隣の酒屋の息子で正太郎の同級生でもある勝利が仲裁に入り、「康正」、「正」を下に持ってきて、かつ「こうせい」と音読みすることで決着した。銭湯は正彦が継いで、康正は造船の会社に勤めて遠い地方へ転勤し、その四年後に生まれた息子には「正」の字はつけなかつた。

正彦は当初、銭湯を継ぐつもりはなかつた。だから自分が将来息子を持つても「正」の字をつけなくてもいいんじゃないかと考えていた。正彦の解釈では、「正」は家系の正統性というよりも銭湯の屋号に近しいものだった。伝統工芸の職人で「何代目なんとか」という名前を代々受け継ぐところがあつて、代替わりすると戸籍の名前を変更するのだとなにかの本で読み、感心すると同時に自分の名前を変えてまでその伝統を守るといふのはどんな気分だろうか、想像がつかない、と三日ほど考え込んだ。そして結論として、銭湯を継ぐのでなければ「正」も継がなくていいのでは、と突然閃いたのだつた。

そのことは父の正太郎には話さなかつた。話せば気の短い父が怒ることは容易に想像がついた。パイロットになりたいことも、なかなか言い出せなかつた。言い出せないうちに、正彦は成績もよくないし、視力も悪くなったのでパイロットになることをあきらめて、高校を出たあと五年ほど隣の食品卸の会社に勤め、その事務をしていた光子と結婚して、銭湯を継ぐために家に戻ってきた。正太郎はよろこんだ。やつぱりおまえはおれの息子だ、「正」の字を受け継いだ、この銭湯の跡継ぎだ、とその夜は遅くまで酒を飲んだ。

4
正彦の最初の子供は女の子だった。女の子が生まれて安堵している自分に、正彦は気づいた。名前に「正」をつけるかどうか決断しなくてよかったからだ。名前は陽子にした。2年後に生まれた二人目は男だった。正彦は迷いに迷ったが、「正之助」と名前をつけた。当時としては少々古風な名前だったが、子供のころに愛読していた漫画の主人公にあやかった。光子は、正彦から代々「正」の字をつけることを聞かされても、伝統はだいいじにしたほうがいいわよ、受け継ぐものがあるなんて素敵じゃない、と A よろこんだ。正太郎は、いい嫁をもらったと氣をよくし、銭湯の裏手にある自宅を二世帯住宅に建て替えた。

正之助は小学校に入った。クラスでいちばん小さかった。近眼で眼鏡を掛けていたので、ガリ勉とあだ名をつけられたりした。「将来の夢」という題の作文が宿題に出たとき、正之助は「俳優」と書いた。学校から帰った夕方にテレビで再放送されている時代劇を見るのが好きだったのだ。光子は、そんなのは男が真面目に検討するような仕事ではない、今そう思うのはかまわないが、小学校を卒業するころにはもっと現実的になってほしい、お母さんはここは立地がいいから建て替えて流行りの娯楽施設もある銭湯にすればいいと思う、お父さんは商才があるし、もっと事業を広げるはずだから、おまえもそれを引き継ぐのがいちばんよ、なんといつても「正」の名前をもらったのだから、と話した。光子は銭湯の肉体的にきつい仕事も文句一ついわずにこなした。夜中までかかる掃除を毎日やり、朝は家族の中でいちばん早く起きて朝食を作った。

正之助が高校を卒業するころには、銭湯の客はずいぶんと少なく

なっていた。正太郎も腰を痛めて番台に上がらなくなり、裏手の家の居間でぼんやりすることが増えた。正之助は、俳優になるという希望を持ち続けていて、しかしそれを家族には言わないようにしていた。繁華街の映画館に通い、その帰りにできたばかりのレンタルビデオ店で昔の映画を借りるのが日課のようになっていた。光子も、このごろは銭湯を継ぐ話はしなくなった。B、正之助に実業についてほしいという希望は強かった。学校の成績もよかったし、先生たちも薦めるように地元の国立大学へ行くものだと疑わなかった。息子がどこか遠くへ行こうとしているのではないかと、正彦のほうはなんとなく感じ取っていた。だが、銭湯を継がなくていい、とは言い出せなかった。息子の名前に結局は「正」の字をつけたように、自分がなにかを変えたり終わらせたりする決断は難しかった。C、子供のころから遊び場でもあり、仕事を手伝い続けた銭湯に深い愛着を感じていた。毎日来ていた近所の老人たちが、一人、また一人と姿を見せなくなることにさびしさを感じてもいた。

正之助は、地元の国立大学へ進学したが二年で中退し、評判になっていた小劇団へ入るために家を出た。光子は泣いて反対したが、正彦は黙って送り出した。正之助はしばらくは鳴かず飛ばずで、酒屋でアルバイトをしながら珍しくなった風呂なしアパートに住んだ。近くの銭湯に通った。行くのはいつも日付が変わるころで、なぜかその時間に来る客は背中に入れ墨のあるものたちばかりだった。実家ではあの大きな湯船に入ることはなかった。正之助たちにとってそこは働く場所だった。客としてゆっくり湯に浸かっていると、銭湯がいいところだと思えるようになった。知らないもの同士が風呂に入って黙って

帰っていく、奇妙だが安らかな場所だった。

三十歳を過ぎて出演したドラマの脇役が業界内で評判になり、正之助はやつと役者の仕事でなんとか生活ができるようになった。本名で仕事をしてきたのだが、「正之助」という名前はつきり芸名だと思っただ、とよく言われた。うちは代々「正」をつけることになっていて、と正之助は答えるが、理由もいつからなのかなにも知らないのだった。

正之助がガラス張りのバスルームが自慢の部屋に引越すころ、正太郎が死んだ。もう長いこと介護施設に入っていた。祖母の明子は、テレビで正之助を見るのを楽しみにしていたが、このごろはそれが自分の孫であることを忘れ、若いころに好きだった俳優に見えることがあるようだった。正太郎の通夜の夜、正彦は銭湯を廃業することを正之助に伝えた。折からの燃料高で経営はもう限界だった。正之助は正彦に、風呂なしアパート時代に通った銭湯の話をした。それを聞いた正彦は、自分も銭湯の客になりたかったと思った。

築八十年近い建物は取り壊す予定だったが、長女の陽子が周囲の反対を押し切ってカフェとイベントスペースにリノベーションした。増築してゲストハウスも作ったら外国からの観光客が来るようになった。マイル張りの浴槽は、女湯はステージになり、男湯はバーのカウンターになった。陽子は、銭湯の子に生まれてよかった、と楽しそうに語った。正之助は四十歳になって、映画監督の今井照美と結婚し、翌年に男児が生まれた。照美がある夜に夢で見たという名前をつけた。「正」の字は入っていなかった。

(柴崎友香『百年と一日』筑摩書房所収)

「銭湯を営む家の男たちは皆『正』という漢字が名前につけられていてそれを誰がいつ決めたのか誰も知らなかった」より

※1 番台：銭湯の入り口にある受付台。

※2 冒険譚：冒険をテーマにした物語。

※3 理不尽：筋道の通らないこと。

※4 屋号：家号。その一門や一家の特徴をもとに付けられる称号。

※5 レンタルビデオ店：ビデオテープ（映画などの映像を収めた箱型のメディア）を貸し出す店舗。後にレンタルDVD店などに移行しはじめるが、現在も存在している。

※6 リノベーション：内装や間取りに改修を加え、既存の建物の価値を高めること。

問一

A } C に入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を二度使ってははいけません。)

ア それに

イ つまり

ウ むしろ

エ それでも

問二 —— 線 a 「まれだった」・ b 「折おひからの」とありますが、本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a まれだった

ア 当たり前だった

イ めずらしかった

ウ あこがれていた

エ 恵めぐまれていた

b 折からの

ア ちょうどその時の

イ 急な変化による

ウ 運悪く

エ 以前から続く

問三 —— 線 1 「正太郎は、小学校に入って少々混乱した」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「正」の字を使った名前を持つ女性に、二人同時に出会うのが初めてだったから。

イ 本当は男性なのに、女性のふりをした人を生まれて初めて見たから。

ウ 男性にのみ使われる「正」の字を名前に持つ女性が存在することを知らなかったから。

エ 幼稚園に通わなかった正太郎にとっては、家族以外の女性を見る機会が今までなかったから。

問四

—— 線 2 「初めて生まれた〜正彦とつけた」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 男児の命名に「正」の字を使わないことによって、罰ばつを受けるのが嫌いやだったから。

イ せっかく男児が生まれたからには、男児にしか使えない「正」の字を使わない手はないから。

ウ 男児の名に「正」の字を使う理由は不明だが、知る必要もないし、単純に良い意味だから。

エ 男児が生まれたら「正」の字を使って命名することを、幼いころから言い聞かされてきたから。

問五

—— 線 3 「次男の名前はなかなか決まらなかった」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 男児には「正」の字を使わなければならないしきたりを聞かされていなかった明子が激怒し、気が鎮しずまるのに時間がかかったから。

イ 「正」の字を、名前の二文字目に使うという前例がなかったため、正吉やその他の親族の了解りょうかいを得るのに時間がかかったから。

ウ 二人目を生む時になって、実生活での呼びやすさを重視し、伝統を拒絶する明子と、伝統を重んじる正太郎とのあいだで意見が対立したから。

エ 「正」の字を入れることの正当性をはつきりと説明できない正太郎に対して、理屈が通らないことに我慢ならない性格の明子が反発したから。

問六 —— 線4・5について、後の(1)～(3)の問いに答えなさい。

(1) —— 線4 「正彦の最初の子供は女の子だった」とありますが、ここでの「正彦」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 女兒が生まれたため、命名に際して「正」の字を用いるか否かで悩まずに済んだことに安心した。

イ 男か女かに関わらず名前に「正」の字をつけるべきだという議論が出たが、最終的には「陽子」に決めた。

ウ 男児の「正」の字を使う命名に関して、新世代の方針を父親である自分が決めねばならないと意気込んでいる。

エ 弟・康正の命名の際に「正」の字をめぐる言い争いがあったことを知っていたため、妻・光子の反応を恐れている。

(2) —— 線5 「二年後に生まれた二人目は男だった」とありますが、その命名に関する「正彦」と「光子」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 正彦は「正」の字をなぜ使わなければならないのかと強く反発していたが、そんな悩みをよそに、伝統を重んじる光子が「正之助」に決めてしまった。

イ 「正」の字を使わなければならないしきたりにずっと悩んでいた正彦を、むしろ光子が伝統は受け継ぐべきだと後押しするかたちで「正之助」に決まった。

ウ 正彦の悩みを知った光子の計らいから、正彦と光子の両親から名前を引き継ぐという形で、二人の意見がまとまり「正之助」に決まった。

エ 優柔不断な正彦は、悩んだ末に「正」の字を用いることにしたが、光子には、幼いころ読んだ漫画の主人公にちなんだものと嘘を吐いて「正之助」に決めてしまった。

(3) 「光子」の性格に当てはまらないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 他人からの指摘を受け入れれない。

イ はつきり物事を決められない。

ウ 伝統を受け継ぐ態度を拒絶しない。

エ 柔軟で先進的な考え方をする。

オ 勤勉で献身的に役目を全うする。

問七 —— 線6 「銭湯を継がなくていい、とは言い出せなかった」

7 「正彦は黙って送り出した」とありますが、ここでの「正彦」を説明したものと最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 勉強ができて、真面目に生きてきた正之助が抱いた夢であるならば応援したい気持ちもあるが、光子が反対するように、男が役者の世界で活躍するのはなかなか難しいとも思うため、何も言えずにいる。

イ 古いしきたりに反発しながら結局何も変えられず、パイロットの夢も途中であきらめる自分と比較すれば、強い意志で夢を追いかける息子は立派だと思ふものの、光子が反対している手前、沈黙を選ばざるをえなかった。

ウ 受け継いできた愛着のある銭湯を自分の代で終わらせてしまふことをためらいながらも、パイロットになる夢を諦めた身としては、正之助の俳優の夢を応援したい気持ちもあるため、黙認することにした。

エ 俳優という夢を持つのは自由だし、銭湯への客足が遠のきつつある時代に、無理に家業を継がせるつもりはないが、せっかく国立大学に入ったのだから、安定した仕事に就いたほうがよいのではないかと思ひ巡らせている。

問八 —— 線8 「正之助は正彦に（客になりたかったと思つた）」

とありますが、ここでの「正之助」と「正彦」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 俳優という無謀な夢を語って光子に家を追い出された正之助であったが、父に対しての愛着は消えることなく銭湯に通い詰るといふ形で継続していたことを、長い年月を経て息子から伝えられた正彦は、パイロットの夢を諦めた自分の分まで活躍してくれたことを誇りに思いながら正之助の話に耳を傾けている。

イ 正之助は、実家の銭湯と距離を置き、夢を追いかける下積み生活の中ではじめて働くための場所ではない銭湯の良さを知つたため、実家の廃業を告げられた際に、そのことを父に伝えたいと思ひ、一度も客として銭湯に接したことのない正彦は、もはや自分では知り得ないその感覚を、嬉しさと切なさとともに聞いている。

ウ 家出同然に地元を離れて銭湯という場所から切り離されても、気付いたら銭湯に通つていたという話を、俳優業で成功を取めた後になって正之助から聞かされても、それは余裕ができた今だからこそ感じられることなのだろうと正彦は思ひつつ、和解に来た息子をいい加減に扱えるわけもなく静かに話を聞き続けている。

エ 正之助は、実家を出た後の苦しい下積み生活の中で、深夜によく銭湯を利用することになり、見ず知らずの者たちが親しげに一日の疲れを取るその空間に好感を持ったことを正彦に伝えると、正彦自身はそれが感じられないことを残念に思いい、またそのような状況に自分を押しやっただれまでの優柔不断な人生を後悔している。

問九 本文から読み取れるテーマを次の語群から一つ選び、本文のどこからそのテーマを読み取ったのかを具体的に説明しなさい。

伝統(でんとう) 性差(せいさ) (ジェンダー) 後継者問題(こうけいしや)
文化保存(ぶん化ぼぜん) 世代間格差(せだいかんかくさ)

三

次の文章は作家である筆者が読書について述べたものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

やがて中学校へ進み、いよいよ決定的な本と出合うことになりました。『アンネの日記』です。この本については、今までもいろいろな機会に書いたりお話ししたりしてきましたが、たえしつこいと嫌がられても、何度でもこの日記の素晴らしさについては主張すべきだと考えています。

A 何より、思春期のしかも少女の複雑な内面を、これほど生き生きと描写した文学は他にありません。死が言葉で表現できないのと同じ意味で、思春期もまた、本来表現不可能な時代です。それを思春期の只中(ただなか)にあつた少女がやっけてのけたのです。言葉の豊富さ、キティという架空(かくう)の友だちを持つてくるという、現実との絶妙(ぜつせう)な距離(きょり)の測り方、自己の内面を見つめる視線の確かさ、大人たちに向ける批判精神(ひはんせいしん)、ユーモアのセンス……、どれを取っても十四、五歳の少女とはとうてい思えない才能です。

この日記を読めば、二年あまりの間、あの狭い場所に閉じ込められた状態で、実にさまざまな出来事が起こり、アンネを含めた子供たちがいかに成長したかが分かります。隠れ家庭生活(かくれかぞえいけん)といつても、ただじつと丸くなつて隠れていたわけではありません。母親との対立に苦悩(くろう)し、(支援者(しえん)の名前を借りて行つていた)通信教育での勉強に喜びを見出し、将来の夢を描き、支援者たちへの感謝を忘れず、別れてきた友達へ思いを馳せ(は)、性の問題に悩み、ペーターとの淡い恋(あわ)に胸をこがす……。息を殺し、存在を消して過ごさなければならぬ、単調であつ

たはずの日常が、アンネにとつてはたいへん濃密なものでした。それが、この日記からはありありと伝わってきます。

私はここでも、^{※1}ドイツカー先生の絵画教室の子供たちを思い出します。彼らが収容所で、絵を描くことよつて自由を味わい、自我を獲得したのと全く同じことを、アンネ・フランクは隠れ家で成し遂げました。^{※2}

^{※2}河合隼雄さんは、『物語を生きる——今は昔、昔は今』の中で、「子どもが大人になることは大変なことであり、短期間に心身共大変革を遂げるので、その間は何らかの強い守りが必要とする。さなぎが固い殻に守られているのと同じである」と述べていらつしゃいます。その例として、中世の物語の『鉢かづき』の鉢、『うばかは』の皮、あるいは西洋のお話として『白雪姫』のガラスの棺、『ラプンツェル』の塔、『眠りの森の美女』の百年の眠り、などを挙げています。

^{※3}テレジンの子どもたちにとつての収容所、そしてアンネにとつての隠れ家は、悪意によつてもたらされたマイナスの場所でありましたが、周囲の大人たちや本人の才能によつて、そこを強い守りとすることができました。その強固な殻の中で、自分とは何かを問ひかけ、それを表現し、自己を高めていったのです。一旦閉じこもることによつて、外の世界と適度な距離を取り、自分と一対一で向き合うことによつて、孤独を手に入れる。その孤独が人を成長させるのだと思います。サナギになつて一旦死んだように静かになつたあと、昆虫が劇的な変化を見せて成虫になるのと同じです。

アンネ・フランクの場合も、もちろん彼女だつて平和な時代に生まれ、のびのびと才能を發揮すべきでした。

B 『アンネの日記』と

いう人類の財産を残さなくても、彼女には生きる当然の権利がありました。しかしそのことを十分に承知したうえで、この特別な才能を与えられた少女が、隠れ家という殻に閉じ込められたことには、深い意味があつた。彼女は生まれながらに使命を背負つていて、それを見事なまでに果たしたと思います。

私自身、もし思春期の私を守つてくれる殻があつたとしたら、それは読書であつたと確信しています。読書をしている時だけは、本の世界の閉じこもり、自分を現実から守ることができた。そう思っています。だからこそ、本たちには今でも感謝したい気持ちです。

『ファーブル昆虫記』の中でファーブルは、スカラベ・サクレのサナギについて次のように描写しています。

「スカラベのサナギの美しさはたとえようありません。そのととのつた形といい、半透明でハチミツのような黄色みをおびた色あいといい、コハクか、トパーズのような宝石を彫つてつくつたかざりものようです。ふんの玉の中で、ふんを食べて育つたのに、体には一点のよごれもありません。

^{※4}前肢は、スカラベの成虫がきゆうにショックをうけて死んだまねをしたときのように、両方ともぎょうぎよくそろえて胸の上におりたんでいますし、あとでさやばねになる部分は、深いみぞをきざみこんだ帯のような形で前のほうにたたまれていて、背中やおなかの部分はむきだしになっています。

なんだか、麻布でぐるぐるまきにされたエジプトのミイラのような、神秘的なふんいきさえあります」(一九九一年版)

この文章を読む時、^{※5}アウシュヴィッツからベルゲン・ペンゼン強制収容所へと移送され、寒さと飢えに苦しみながらチフスで命を落とし、そのなきがらがどこへ埋葬されたかも分からないまま、あの世へ旅立ってしまったアンネの二年あまりの隠れ家生活が、スカラベのサナギのような輝きを放った一瞬であつてくれた、というささやかな慰めを感じるのです。

先に挙げました河合隼雄さんの『物語を生きる』の中で、もう一つおもしろいことを教わりました。キリスト教が伝来した時、外国人宣教師の言う「アニマ・anima・たましい」という言葉を、日本人が聞き間違え、³「アリマ・在り間」と表記したのです。河合さんはこれを、素晴らしい誤りと書いておられます。C、存在するものとのとの間にある目に見えないもの、ものが普通に存在するような意味では存在しないもの、それが魂だということなのです。

物語とはまさに、普通の意味では存在し得ないもの、人と人、人と物、場所と場所、時間と時間等々の間に隠れて、普段はあいまに見過ごされているものを表出させる器ではないでしょうか。『トムは真夜中の庭で』の中で、十二時と一時の間の十三時が、物語の入り口であったことは、まさにこのことを象徴していると思います。あいまであることを許し、むしろ尊び、そこにこそ真実を見出そうとする。それが物語です。

同じく河合さんは、『ココロの止まり木』という本の中で、京都国立博物館の文化財保存修理所を見学した折、欠けた布を修復する際に補修用の布がもとの布より強いと、結果的にもとの布を傷めることに

なる。補修する布はもとの布より少し弱くなくてはいけない、という話を聞き、カウンセリングという自分の仕事に似ていると感じた、と書いておられます。補修する側が補修される側より強すぎると駄目なのです。

物語もまた人々の心に寄り添うものであるならば、強すぎたはいけないということになるでしょう。あなた、こんなことでは駄目ですよ。あなたが行くべき道はこつちですよ、と読者の手を無理矢理引つ張るような物語は、本当の物語のあるべき姿ではない。それでは読者をむしろ疲労させるだけです。物語の強固な輪郭に、読み手が合わせるのではなく、どんな人の心にも寄り添えるようなある種の曖昧さ、しなやかさが必要になると思います。到着地点を示さず、迷う読者と一緒に彷徨するような小説を、私も書きたいと願っています。

^{※6}レイモンド・カーヴァーは「書くことについて」(『ファイアズ(炎)』収録)というエッセイの中で、^{※7}

「作家にはトリックも仕掛けも必要ではない。それどころか、作家になるには、とびつきり頭の切れる人間である必要もないのだ。たとえそれが阿呆のように見えるとしても、作家というものはときにはほうつと立ちすくんで何かに——それは夕日かもしれないし、あるいは古靴かもしれない——見とれることができるようになってはならないのだ。頭を空っぽにして、純粋な驚きに打たれて」

この一文に出会った時、私は子供の頃読書から得た、⁴二つの矛盾しながら共存する思いを蘇らせました。ほうつと立ちすくんで、夕日や古靴を眺める。それはまさに自分が世界の一部分であることの確認です。そして、純粋な驚きに打たれる時、私はその驚きを自分だけに特

別に授けられた宝物として受け取ります。そうして、そこから小説を書くのです。

つい先日、私の本の外国語訳を仲介してくれているエージェントから、『博士の愛した数式』のイスラエル版の契約書が送られてきました。この契約は本来もつと早くに済んでいるはずだったので、今年七月十二日、ヒズボラがイスラエル兵士二人を拉致したことに端を発するイスラエルのレバノン侵攻のために、仕事が滞ってしまい、八月十四日に停戦が成立して、ようやく本の出版も再び動き始めた、という連絡を受けました。結局この戦闘で、レバノンでは市民を中心に一〇〇人以上、イスラエル側は兵士を中心に一五〇人以上が死亡しました。このことは、自分の小説が現実社会と無関係ではいられないということ、改めて知らしめています。もしかすると、爆弾が飛び交っている下で、私の小説が読まれることもあるかもしれない。その時、エージェントの人が送ってくれたメールには、

「同じ日本で育った人たちは共通の思いを分かち合う」という一文が添えられていました。

民族も言葉も年代も性別も違う人間が、どこかで出会ったとします。その時、お互いの心を近付ける一つのすべは、どんな本を読んで育った人か、を確かめることかもしれません。もしその人が、『ファーブル昆虫記』や『トムは真夜中の庭で』や『アンネの日記』をあげたとしたら、私はたちまちその人と心を通わせることが出来るでしょう。もう一つ贅沢を言えば、いつかそういう場面で、私の書いた小説を誰かが挙げてくれたなら、作家としてこんなに大きな幸せはありません。

もちろんその時、私はもう死んでいるだろうと思います。

自分が死んだ後に、自分の書いた小説が誰かに読まれている場面を想像するのが、私の喜びです。そういう場面を想像していると、死ぬ怖さを忘れられます。

だから今日もまた私は、小説を書くのです。

(小川洋子『物語の役割』筑摩書房より)

- ※1 デイツカー先生：チエコスロバキア（現在のチエコ共和国とスロバキア共和国）のユダヤ人収容所で、絵を描くことで子どもたちに生きる喜びを教えた人物。
- ※2 河合隼雄：日本の心理学者。
- ※3 テレジン：ユダヤ人強制収容所があったチエコスロバキアの街。
- ※4 スカラベ・サクレ：昆虫のフンコロガシ。古代エジプト人は聖なる甲虫としていた。
- ※5 アウシュヴィッツ：強制収容所：どちらもポーランドのユダヤ人強制収容所があった街。
- ※6 レイモンド・カーヴァー：アメリカの小説家、詩人。
- ※7 エッセイ：筆者の体験や感想などを著したもの。
- ※8 今年七月十二日、ヒズボラがイスラエルと敵対するレバノンの武装組織であるヒズボラがイスラエルの兵士を連れ去った事件のこと。

D

問一 文中の A 〽 D に入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号を二度使ってははいけません。)

- ア たとえ
- イ しかし
- ウ まず
- エ つまり

問二 ——線1「この日記の素^す晴らしさ」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア アンネが、多感な年齢の少女だけが持つ繊細な表現で、自身の過酷^{かこく}な隠れ家生活を大人だけでなく幼い読者の心にも強く訴えたこと。
- イ 中学生の頃のうまく言葉で表現できない私の難しい気持ち^{きもち}を、アンネが作品の中で巧みに表現してくれたこと。
- ウ アンネというまだ十四、五歳の少女が、思春期における複雑な心情や隠れ家での濃密な時間を鮮やかに表現するという才能を示したこと。

エ アンネが過ごした苦しさに満ちた時間が、彼女の文学的な才能を開花させ、表現の難しい思春期の内面を空想や批判という形で描かせたこと。

問三 ——線2「サナギになって〽成虫になる」について、後の

- (1) (2)の問いに答えなさい。
- (1) 「サナギになって〽静かになった」とありますが、このたとえを「アンネ」にあてはめた場合、どのようなことを表現していますか。ていねい^{ていねい}に説明しなさい。

(2) 「昆虫が〽成虫になる」とありますが、このたとえを「アンネ」にあてはめた場合、どのようなことを表現していますか。ていねいに説明しなさい。

問四 —— 線3 「素晴らしい誤り」とありますが、「河合さん」が

そのように表現した理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 宣教師が持ち込んだ「アニマ」という言葉を、あえて「在り間」と書き記したことが、結果的には魂の本質を示すことにつながっていたから。

イ 「アニマ」という外国語を聞き誤って「在り間」と表記したことが、偶然にも魂がどのようなものであるかを的確に言い表していたから。

ウ キリスト教の言葉である「アニマ」を「アリマ」と聞き間違えたことが、結果的には魂がどのようなかを人々に広めることにつながったから。

エ 魂を意味する「アニマ」という言葉を「アリマ」と聞き間違えたが、「アリマ」は偶然にも別の外国語で使われている単語と一致していたから。

問五 —— 線4 「二つの矛盾しながら共存する思い」とありますが、

その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日常の中で色々なものを見るたびに世界の成り立ちがどのようなになっているか考えようとするが、自分以外の存在の数に圧倒されて考え切れない。

イ 何かに見とれた時に世界は多くのものから出来ていると知るとともに、実は自分が世界を構成する最も重要な部分と気づき、驚きを感じている。

ウ 自分以外の何かに出会った時に頭を空っぽにして眺めることで純粹な発見をする一方で、その発見を小説に高めなければならぬ責任の重さに驚く。

エ さまざまなものを目にして自分も世界の一部分にすぎないと実感するとともに、その発見をした自分を特別な存在として受け止めている。

問六 —— 線5 「だから今日もまた私は、小説を書くのです」とありますが、ここでの筆者の考えを説明したものと最も適当な

ものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 小説の最大の価値は文化が異なっても交流を可能にしてくれることにあるので、一つでも多くの作品を書くことで自分も世の中に貢献したい。

イ 私が書いた小説は、私の死後も残る不滅のものであるため、それらを世界に送り出し続けることで私の存在を人々が認識してくれる。

ウ 共通の読書体験は、人々の間にあるさまさまな違いを越えて互いに分かり合えるものなので、自分も小説を書くことで長く世の中の役に立ち続けたい。

エ 世界中のあらゆる存在から提供されたものを題材にして行う小説の創作は、私にとってこの上ない喜びであると同時に死への恐怖を和らげてくれる。

